**「中国語はいつから方言に分かれたのか」**

**お断り**

**考察中のため校正もまったくできていません。よろしく配慮願います。
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2013.6. 20特に記す。**

1. **中国語はいつから方言に分かれたのか**

前回はチベット語の「shad(ⅼ)のまえのnga字のみtsheg(ˑ)を打たねばならない規則」はtsheg(ˑ)の古音をɴʔ と考えることによって解けることをみました(1)。今回は少し目先をかえて**「**中国語はいつ方言に分かれたのか」という問題を考えてみたいと思います。
　中国語の歴史は次のように区分されます(藤堂 昭和42:33)。

* 1. 太古漢語(Proto-Chines)　殷代〜西周(前15C〜前10C)
	2. 上古漢語(Archaic-Chines)　東周〜春秋戦国〜秦漢〜三国(前7C〜後4C)
	3. 中古漢語(Ancient-Chines)　六朝〜隋唐(後6C〜後10C)
	4. 中世漢語(Middle-Chines)　宋〜元〜明(後11C〜後16C)
	5. 近代漢語(Modern-Chines)　清〜現代(後17C〜後20C)

　このように長い歴史をもつ中国語は現在次のように7つの大方言に分かれています(詹　昭和58:120, 144, 147-8, 158, 176, 192, 209-210より引用、まとめた)。

|  |  |
| --- | --- |
| 北方方言区 | 官話音系。華北方言、西北方言、西南方言、江淮方言(下官話とも)の4方言にわかれる |
| 呉方言区 | 江浙方言(江蘇および浙江の北部)と浙南呉語(浙江の中部と南部)の2方言にわかれる。 |
| 湘方言区 | 湘語(湖南話とも)。古代の「楚語」嫡親関係にあり。湖南省で話され、長沙話・双峰話など。 |
| 贛方言区 | 贛語(江西話とも)。江西省の大部分の地区で話される。南昌話など。 |
| 客家方言区 | 広西では「新民話」・「麻介話」、四川では「土広東話」と呼ばれ、もと中原一帯の漢人の南方への五度にわたる大規模移民によって独特の客家語となる。広東省内の梅県話が代表方言。 |
| 粤方言区 | 粤語。広東省内と広西省内に行われている広州話を中心とする方言。粤海系など5方言に分かれる。また外国の唐人街(Chaina Town)で使用されている中国語。 |
| 閩方言区 | 閩語(福佬話とも)。内部方言差が大きく、福建省内や台湾、華僑にも使用され、閩南方言（厦門話など）・閩東方言(福州話など)・閩北方言(建甌話が代表)の3方言にわかれる。文白異読の現象が普遍的に存在する。 |

＊文白異読：「閩南系がとくに著しい。厦門一帯では文言音と白話がほとんど各々自ら体系をなしており,かなりきちんとした対応がある」(詹　昭和58:239)。

そこで以下の考察の理解をたやすくするために中古中国語の嫡流とみられる北京方言が属する北方方言区の方言を北方方言、また湘方言区・贛方言区・客家方言区・呉方言区、粤方言区と閩方言区の方言を一括して便宜的に南方方言と呼ぶことにします。そこで中国語が北方方言と南方方言に分かれたのがいつごろからなのかを知るために、方言に関する記述を(中国語学研究會編 昭和44：248,227,218209,220より引用、まとめた)時代順に見ると、次のようになります。

1. 『方言』：漢の揚雄(B.C.53〜A.D.18)の著。原題は『輶軒使者絶代語釈別国方言』で、『方言』は略称。晉の郭璞(かくはく,276〜324)の注。都に集まった文官試験の受験者から採集した方言語彙の稿本
2. 『顔氏家訓』：「六朝末年の教養人である顔之推(531-591以後)の著。〈音辞篇〉は南北の発音の比較・正訛をおもに論じ」、「顔之推が《切韻》の編集に参画した有力メンバーであったため,《切韻》の言語学的背景を知るうえでの根本史料の一つとされる」。
3. 『切韻』：隋仁寿元年(601)に陸法言を主編者として編定された韻書。《広韻》より韻目は少ないが,全体の体系は《広韻》と一致する。隋の開皇の初め,顔之推を含む北方人と南方人の同志８人が陸法言宅に集り酒をくみつつ南北古今の韻書についてよしあしを論じ,適切な反切を選び,記述したもの。平上去入の4声,193韻の韻目を立てた。鄴都から洛陽にかけて実在した六朝末の標準的な読書音の体系を示したもので,南朝江南の読書音もほぼ同質であったと考えられる。
4. 『広韻』：北宋の大中祥符元年(1008)に,陳彭年・邱䁘雍らが勅命によって撰定したものが《大宋重修韻広韻》、略して《広韻》。韻目は206。
5. 『中原音韻』：元代中原(長江以北の地)に行われていた共通語ともいうべきものに基づいて作られた韻書。江西高安の周徳清(字は挺斉,生歿年不詳)が元曲の作家のために編纂したもので,泰定元年(1342)に完成した。『広韻』に代表される中古漢語と比較すると,入声の消失,声母の清音化などが起こっている。

このように古代の中国語は西暦前後にはすでに方言と呼べるような違いがあり、7世紀初めころには北方人と南方人の言葉にはかなりの違いがあったことがわかります。しかし「北方標準語と南方標準語との關係は、あたかも近代の北京官話と南京官話との關係の如く、大同小異の性質を持つたものであつたと思はれ」(有坂 昭和32:302)(藤堂 昭和62:74)、その方言差はあまり大きくないと考えることもできるでしょう。そこでまだ大きく方言に分化せず統一体としてみることができる中国語を上古中国語と考えれば、中国語は上古中国語から切韻で代表される中古中国語を経て、現代中国語へと変化してきたと考えることができるでしょう。

**２．日本漢字音にはどのような層があるのか**

　ではこの上古から現代にいたる中国語はいつから方言に分化したと考えられるのでしょうか。この問題を考えるために日本の呉音と漢音などの借入状況を次にみてみることにします(中国語学研究會編 昭和44:121-2より、引用まとめた)。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  |  | 例：「行」 | 例：「宜」 |
| 古音 | 周秦(西紀前)から漢魏(3世紀)三国(6世紀)までの南方方言を借入したとみられ、推古朝遺文や古代歌謡の字音にみられる。 | ゴウ | ガ |
| 呉音 | 六朝時代の5・6世紀の切韻に近い字音が仏教の伝来とともに江南地方より伝えられた。「古事記」(712)や「万葉集」(759よりあと)。 | ギャウ | ゲ乙 |
| 漢音 | 唐代(618-907)の長安・洛陽を中心とした当時の標準語とみられ、西北方言の色彩の強いもの。「日本書紀」(720)。 | カウ | ギ乙 |
| 新漢音 | 円仁をはじめ、唐末に入唐した求法僧らによって伝えられた9世紀初頭以降の唐代長安音。 | ケイ |  |
| 宋音 | [鎌倉時代](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%8E%8C%E5%80%89%E6%99%82%E4%BB%A3)に臨済宗や曹洞宗の禅僧などによって伝えられた宋から元初(10〜13世紀)の江南地方の字音。 | アン |  |
| 唐音 | 江戸時代に黄檗僧や長崎の通事、商人などによって伝えられた明から清初(14〜18世紀)の南京官話および杭州官話系の字音。 | ハン |  |

＊以下の考察では呉音と和音、漢音と正音との関係(高松政雄 昭和62:71)は考えず、常識的な呉音と漢音で考えます。

ところで4世紀後半から5世紀初葉に・が百済より来朝し、6世紀中葉の飛鳥朝時代には佛教のような精神文化をも受容しうる段階に達した。589年に隋は天下を統一し、中原長安に都を移したのち、推古15年(607)小野妹子らを遣隋使として隋に派遣し、その後隋の滅亡により遣隋使から遣唐使にかわり、[894年](http://ja.wikipedia.org/wiki/894%E5%B9%B4)[菅原道真](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8F%85%E5%8E%9F%E9%81%93%E7%9C%9F)の建議により停止されるまで唐代長安音(漢音の源流)が続々流入しました。また660年百済滅亡により大量の亡命者が日本に渡来するといった事件により、漢字も日本人貴族や僧侶たちに身近になっていったと思われます。呉音は江南系の南方方言（朝鮮半島経由であるかどうかといった由来は今は問題にしません）、漢音は唐代長安・洛陽を中心とした当時の都ことばである北方方言を借入したものであると考えられています。
　そこで上の古音・呉音や漢音の流入した状況を模式図であらわすと、次のようになるでしょう。

模式図A

|  |  |
| --- | --- |
|  | 　　　　　4世紀頃　　　　　　『切韻』(601)　　　　　　　　　　　10世紀　　　　　　　　　　現代 |
| 中国語 | -----北方方言----------------┬--------------------------------└-漢音-------[894年](http://ja.wikipedia.org/wiki/894%E5%B9%B4)遣唐使停止---- | 北京語など |
| 日本語 | 漢音 |
| 中国語 | -----南方方言--┬----------------------------------------------└-呉音----------------------------------------- | 閩語など |
| 日本語 | 呉音 |

　ここで誰もが知っている呉音と漢音の大きな違いを次にみておきます(藤堂 昭和1980:166-172)。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  |  | 呉音 | 漢音 |
| 清濁 | 「刀」：「道」 | タウ：ダウ | タウ：タウ |
| 「糟」：「曹」 | サウ：ザウ | サウ：サウ |
| 鼻音 | 「馬」 | メ | バ |
| 「萬」 | マン | バン |
| 「奴」 | ノ・ヌ | ド |
| 「難」 | ナン | ダン |
| 入声 | -p | 塔 | トフ | タフ |
| 十 | ジフ | シフ |
| -t | 質 | シチ | シツ |
| 吉 | キチ | キツ |
| -k | 各 | カク | カク(/o, a, ə/のあと) |
| 歴 | レキ | レキ(/e, ɛ/のあと) |
| 鼻音韻尾 | -m | 燈心 | トウシミ | 金 | キン |
| -n | 九丹 | クタニ | 近 | キン |
| -ŋ | 双六 | スゴロク | 東 | トウ(/o, a, ə/のあと) |
|  | 清 | セイ(/e, ɛ/のあと) |

このように呉音と漢音には大きな違いが見られます。また日本書紀に「敏達元年(五七二)、高句麗の国使の表疏を、などのに読ませたが、三日のうちに読み解くことができなかった。ところが、百済から新しく来着していたは、これをすぐ読み釈くことができて、東西の史は全く面目を失したという有名な話」(大野 昭和55:196-7)があり、この逸話は上古音に近い旧来の音(呉音)と新来の音(漢音)の違いの大きさをいっているとみることができます。このように上の逸話から『切韻』時代(600年頃)には中国語がすでに北方方言と南方方言に分かれていて、そこには相当大きな音の違いがあったと考えられます。
　ここで中国語方言のなかで一番早く分岐したと思われる閩方言とそれを担った人々がどんな人であったかを、次に簡単に見てみます。「閩方言は, 閩語あるいは「福佬語」とも呼ばれ, 漢語方言の中でも内部分岐が最も大きく, 音声現象の最も複雑な大方言」であり、「上古時代の南方の漢語方言, すなわち揚雄の《方言》にいうところの, 「南楚」, 「江淮」方言」（ともに詹[昭和58:](file:///C%3A%5CUsers%5Cfmv%5CAppData%5CRoaming%5CMicrosoft%5CAppData%5CRoaming%5CMicrosoft%5Creference%5Cref.koizumi1993.html)227）の末裔と考えられています。そして福建の開発が「東漢末(２世紀末)から始められたが, 本格化したのは唐代(7世紀)に入ってからのことで、(以下、一部省略) アモイ方言の最大の特色である口語音の層は, これらの移民がもちこみ伝えたもの」(王 昭和42:440)だそうです。そこでこのような閩語の歴史や『切韻』時代の南方人と北方人の読書音は同質であったらしいことなどから『切韻』時代の鄴都から洛陽にかけての知識人の言葉と江南の知識人の言葉には大きな違いがあったとは考えられないでしょう。「概略的に言って現代諸方言音の多くは, じつは中古音から直接にではなく, 唐代音から, それがさまざま異なる方向に変化したものとして, 説明できる状態にある」(平山 昭和42:165)という考えを認めると、『切韻』時代以前に各地に方言が存在したのは確かとしても長安(2)の北方方言と呉音の借入元である江南の南方方言(朝鮮音を経由しているとかの問題はここでは関係ありません)のあいだには我々が頭に描くほどの差異はいまだなかったと考えられるでしょう。南北方言というような大きな方言差は『切韻』時代以後(3)であると考えられ、1500年経って今のような大きな方言差のある７大方言に分化したと考えられることができるでしょう。そしてこのように考えると、詩経などの韻文の押韻や諧声系列の分析によって再構される上古音と『切韻』の音韻体系が齟齬しないこと、また長安音から現代7大方言への変化がすらすらと説明することができるでしょう。
　そこで上のような考えを模式図であらわすと、次のようになります。

模式図B

|  |  |
| --- | --- |
|  | 4世紀頃　　　　　　　7世紀　　　　　　　　　　　10世紀　　　現代 |
| 日本語 | -------南　　　　　　　　┬----　　　　　　　　　　　　　　　　　　┌--漢音--------------------(方言--┬---『切韻』)┴┬---北方方言---------　　　　　　　　│　　　　　　　　　└---南方方言---------　　　　　　　　└----------呉音-------------------- | 漢音 |
| 中国語 | 北京語など |
| 閩語など |
| 日本語 | 呉音 |

　＊ただし、種々の音韻変化が『切韻』時代にすべて起こったというわけではもちろんありません。

上のような考えは字音「宜」に対する藤堂氏の考え(藤堂 1980:161-2)にも現われています。

|  |  |
| --- | --- |
|  | 4世紀頃　　　　　　　　『切韻』(601)　　　　　　　　　　　　　　　　　　現代 |
| 中国語推定音 | -------南北　　　　　　　　ŋɪa--　----→ŋɪe-----→ŋɪeɪ---------→ŋɪ -----------------│　　　　　　│　　　　　　　　└-ギ乙(「日本書記」)--│　　　　　　└--ゲ乙(古事記・万葉集)----------└-ガ(推古朝音)---------------------------- | 各方言 |
| 日本語 | 漢音 |
| 中国語 | 呉音 |
| 日本語 | 推古朝音 |

つまり上の模式図Bのように南方方言と北方方言にまだ分化していなかった中国語の字音を4-6世紀頃に借入したのが古音・呉音であり、南北方方言に分化しはじめた『切韻』(601)時代よりあとの長安音を借入したのが漢音であると考えてみます。そして呉音と漢音の違いはたかだか400年ほどのあいだの変化によってできた、そう大きくない差であったと考えます。この考えは模式図Aのように南北方言に分岐していた南方方言を借入したのが呉音、北方方言の『切韻』から変化した長安音を借入したのが漢音であるとする考えよりも事実に近いのではないでしょうか。しかしこのような考えには大きな問題があります。なぜなら字音「道」の呉音と漢音がそれぞれ「ダウ」・「タウ」、字音「馬」の呉音と漢音がそれぞれ「メ」・「バ」であり、それらのあいだにある発音の差はとても大きいものがあります。しかし先ほど見たように中国語「宜」の変化は[ŋɪa]→[ŋɪe]→[ŋɪ]であり、各時代における音が日本の推古朝音の「ガ」、呉音の「ゲ乙」、そして漢音の「ギ乙」に反映していると考えることができます。つまり日本で「ガ」から「ゲ乙」、「ゲ乙」から「ギ乙」のように字音が大きく変わっていたとしても、それらのもとである「宜」の変化は南北方言の差としてではなく、たかだか500年程度の音韻変化であったと考えることができました。このような例から上古・中古中国語の南北方言による違いが呉音・漢音の差に反映していると考えるのではなく、中国語内部の音韻変化によって日本に借入された呉音・漢音の差に反映していると考えることができるでしょう。そこで先の南北方言差が呉音と漢音の差に現われたとの考え(模式図A)を南北方言説、分岐するまえの統一体としての中国語の音韻変化が呉音・漢音に反映しているという考え(模式図B)を音韻変化説ということにすれば、南北方言説よりは音韻変化説のほうが事実にあっているといえるでしょう。
　ここで以下の考察のために音韻変化と方言の関係を少し考えてみることにします。

**３．呉音・漢音は中国語の8番目の方言である**

表記と音韻変化の関係を「雀」を例にして考えてみます。「雀」は「」(記雄略)、「」(和名抄)などの万葉仮名で書かれていて、「鳥名にはツバメ・カマメ等語尾にメをもつものが多い」ことから、「雀」の語源は擬声語「須」の重複に鳥名を示す接尾語の「米」がついてできたもの(すべて上代語辞典 1967:389より)と考えることができるでしょう。
　そこで万葉仮名「須受米」にあらわれる「須」と「受」の関係を次にみてみます。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 清音仮名 | 濁音仮名 |
| 古事記 | 「須」 | 「受」 |
| 日本書紀 | 「須」 | 「受」 |
| 主要万葉仮名 | 「須」 | 「受」 |

　＊日本書紀の「す」「ず」の清濁表記には「異例なし」(大野 1953:83)。
＊主要万葉仮名における「す」「ず」の使い分け(それぞれ「須」・「受」)には異例がみられないようです(上代語辞典 1967:895)。
＊「須」と「受」はそれぞれ「心母3等合口虞韻(平声)」、「禅母(常母)3等開口有韻(尤韻の上声)」(森博達1991:219,218)で、中古音はそれぞれsiu, źiu。

　このように「す」には「須」、「ず」には「受」が使用されていて、「す」・「ず」の清濁表記には異例がないことが知られます。ところで「すずめしうしう」の小考(亀井 昭和59:447-464)では雀の鳴き声が江戸時代「しうしう」から「ちうちう」に変わっていることが論じられています。そしてこの考えを受けた「お口をそろえてちいぱっぱ」の小考(山口仲美 1989:110-133)でも雀の鳴き声が「しうしう」から「ちうちう」、そして現代の「ちゅんちゅん」へと変化したことが古典作品を例にあげて詳しく論じられています。つまり雀の鳴き声は上代の「須須」から「しうしう」(一部じじ(めく))、「しうしう」から「ちうちう」、そして現代の「ちゅんちゅん」へと変わったことがわかります。しかしここで疑問が湧いてきます。なぜなら雀の鳴き声は古今東西同じと思われるのに、その鳴き声を上代人は「須須」、中世人は「しうしう」、江戸や京の都の人々は「ちうちう」、そして現代人の我々は「ちゅんちゅん」と聞きなしていることです。上代人や中世・江戸時代人の耳と私たち現代人の耳が異なっているとはとても考えられません。まして上代や中世・江戸と現代の「雀」が違った声で鳴いているとも考えられません。しかしそれなのに雀の鳴き声の表記がこのように違っているのはなぜでしょうか。それは当然といえば当然なのですが、同じ雀の鳴き声を時代によってその表記がかわっただけといえるでしょう。このように考えてくると、雀の鳴き声の表記が違っているから、あるいは違っていないからといって文献にみえる表記からそれらの音が同じだとか、同じでないとか軽々にいうことができないことがわかります。ここで今度は方言と音韻変化のことを考えてみます。たとえば共通語「すみません」は関西方言では「すんまへん」(5)といわれていて、共通語の「セ」が関西では「ヘ」であらわれる特徴は全国的によく知られています。しかし今や全国を席巻する勢いのある「知らね―」や「危ねー」などの「ねー」言葉は若者言葉とみられていても方言とはみなされていません。ではもし或る地方でshiranaiの言葉がみられ、別の地方ではshirane: の言葉がみられたとしてこれらのshiranaiとshirane: の言葉は方言の関係なのでしょうか。また老人の言葉がsumimasenで、同じ土地の若者の言葉がsummahenであるとき、これらの言葉は年代の違いなのでしょうか。このように考えてくると、音の変化と方言の差の関係を簡単に決めることは難しいのかもしれません。
　ここで呉音と閩南語厦門方言の字音(読書音)と話音(口語音)(詹　昭和58:248-253)を以下に比較してみます。（まだ引用せず）

以下は『漢語方言概要』(袁 1989:240-1)より。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 声母 | 両唇閉鎖音 | p | 百 | ビャク | paʔ | pɪk |
| ph | 被 | ビ | phe | phi |
| b | 密 | ミツ | bat | bit |
| 両唇鼻音 | m | 毛 | モウ | ｍãũ | mɔ~ |
| 舌尖閉鎖音 | t | 担 | タン | tam | tã |
| th | 他 | タ | thã | tha |
| 舌尖鼻音 | n | 納 | ロウ | laʔ | lap |
| 流音 | l | 六 | ロク | liɔk | lak |
| 舌端破擦音 | ts | 早 | ソウ | tso | tsa |
| tsh | 草 | ソウ | tsho | tshau |
| (dz) |  |  |  |  |
| 舌端摩擦音 | s | 三 | サン | sam | sã |
| 舌根閉鎖音 | k | 解 | ケ | kai | kue |
| kh | 開 | ケ | khai | khui |
| g | 月 | ゴチ | guat | geʔ |
| 舌根鼻音 | (ŋ) | 五  | ゴ | gɔ | ŋɔ~ |
| 声門閉鎖音 | φ | 安 | アン | an | ũã |
| 声門摩擦音 | h | 考 | コウ | hau | ha |

＊「閩方言区の閩南方言に鼻化韻が最も豊富である。文白異読現象において, 口語音の場合はほとんど弱化して鼻化韻となって」います。また「鼻音韻尾が弱化して消失するに至り, 純口音韻に転化する現象は, 呉方言区の上海, 蘇州などに最も顕著に見られ」(ともに詹　昭和58:49)るそうです。

ところで上表の厦門方言の読書音(字音)は考慮せず、白話音(読音)と呉音を比較してみると、それらの音はよく似ている(6)のがわかります。たとえば「刀」と「道」の呉音は「タウ」と「ダウ」、漢音はともに「タウ」(7)である事実から呉音と漢音では「子音の清濁を区別」(藤堂 1980:167)していた(8)と考えられています。これは本当なのでしょうか。このような疑問はいまだだされたことはありませんが、一度は考えてみるべきです。そこで「道」の呉音「ダウ」と漢音「タウ」の清濁にはさして違いがなかった、その違いはたかだか300年ほどのあいだの変化によってできたそう大きくない差であったと考えてみます。しかしそう考えると「ダウ」と「タウ」の音の違いが大きすぎて問題になります。そこで呉音で濁音だった音は漢音で清音になっているので、もともと呉音「ダウ」と漢音「タウ」の清濁にはさして違いがないだけでなく、呉音「ダウ」は信じられているような濁音ではなく、清音とまぎれるような音(9)であったと考えてみます。このように考えれば、呉音「ダウ」と漢音「タウ」のもとになった中国音を南北方言の差(先ほどの模式図A)ではなく、単なるあまり大きくない音韻変化(先ほどの模式図B)と考えることができるでしょう。そこでもし字音「道」の呉音「ダウ」と漢音「タウ」が「ダウ」→「タウ」の音韻変化として無理なく説明できるなら、呉音が南方方言から、漢音が北方方言から由来するという「南北方言」説を捨てさることができるでしょう。また模式図Bで示したように、中国本土の閩語よりもやや早くに分岐し、離れ小島の日本に伝搬した8番目の方言が呉音であるということができます。上のような音韻変化説はあまりにもとっぴで、とても受け入れがたく見られますが、南北方言説よりもはるかに史実に近いといえるでしょう。このような疑問を解くためには中国語音韻学における未解決の問題を解かねばなりません。
　次節ではそれらの未解決の問題にはどんなものがあるかをみていくことにします。

**４．中国語音韻学における未解決の問題とは何か**

中国語音韻学における未解決の問題には次のようなものがあります。

a. 清濁とは何か-全濁音の出気・非出気の問題
b. 複子音声母は存在したのか
c. 重紐問題とは何か
d. 重唇音から軽唇音になぜ変化したのか
e. 『切韻』時代193韻が存在したのは本当か
f. 声調はどうして起こったのか
g. 入声韻尾の消失の問題
h. 喉音韻尾の問題
i. 影母・喩母・　母の問題などなど

【注】

1. 「「shad(l)の前のnga字にのみtsheg( )を打つ規則」を考える-チベット語の綴りを考える(その１)」http://members.e-omi.ne.jp/ichhan-h/cht/tsheg.html
2. 切韻と唐代長安音の差異について：「初唐の代表的な音韻資料に玄應の『一切經音義』(六六一年頃撰、以下『玄應音義』と略称)があるが、その音韻体系には『切韻』と大きな相違が見られない（3）。(一部省略) 慧琳はしばしば切韻音を「呉音」と呼んで排斥しているほどである」(森博達 1991:293-4)。慧琳は『一切經音義』(七八三〜八一〇年撰、『慧琳音義』と略称)の著者。
3. 王力は「南北朝詩人用韻考」で南北朝(386-600)を3期にわけ、詩人の用韻を研究し、「時代の先後は用韻に対して大きな影響を見せているが、地理的な差異は影響が小さいことを発見している」(水谷 昭和42:97)そうです。もし南北朝の用韻には地理的にほとんど差異がみられないのであれば、『切韻』時の中国語は南北方言に分岐していないとみられ、そこにみられる用韻の変遷は音韻変化とみることができるでしょう。つまり呉音が南方方言に、漢音が北方方言に淵源するのではなく、呉音が漢音にかわったと考えられるでしょう。
4. .「鈴」には「」(記弁恭・万3438)・「鈴須々」(和名抄)(ともに上代語辞典 1985:387)、「千鳥」には「」(記景行) 「」(万4288)(ともに同書:455)の表記がみられます。そして現代音ではそれぞれ「チンチン」・「チリンチリン」と「チリチリ」・「チンチン」(山口仲美 1989:177-198)であるのをみると、「鈴」や「千鳥」の鳴き声も「雀」の鳴き声「チュンチュン」と同じ「チ」の重複語とみられます。
 ＊「雀」の鳴き声の変化：「「須須」と鳴いた雀はいま-サ行音の問題を解決する　その１」(<http://ichhan.sakura.ne.jp/saline/saline1.html>)
5. 「すんまへん」：これは共通語の「すみません」と対応しています。「せ」は中世の「しぇ」(現在の九州方言の一部も)に来源しているので、s/h(←p)の対応を単純にs→hの変化と考えてはよくないので、とりあえず「対応」の言葉を使います。
6. 閩語はふだんに北方方言からの圧力を受けて入類(-k, -t, -p )や陽類(m, n, ŋ )が読書音の形で閩語に残ったと考えられるに対して、日本漢字音は中国語との文法的な違い、そして中国語からの影響が平安朝以後ほとんど絶たれたことを考えると、厦門白話音と呉音との音の近さが上表から実感できるでしょう。
7. 「刀」と「道」の中古音と呉音・漢音の関係は次の通り(藤堂・小林 昭和46:74)。

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 音 | 声母 | 韻母 | 等 | 開合 | 声調 | 呉音 | 漢音 |
| 「刀」 | tau | 端母(t-)  | 豪韻  | １等 | 開合 | 平声 | タウ | タウ |
| 「道」 | dau  | 定母(d-)  | 晧韻 | １等 | 開合 | 上声(平声は豪韻) | ダウ | タウ |

8. 「奈良時代の文獻のうち、古事記の假名が極めて精確といふべき一音一字の表記法によって、清濁をよく書き分けてゐる」(大野 1953:30)と一般に信じられていますが、本当に「子音の清濁を区別」(藤堂 1980:167)していたのでしょうか。上の「古事記は清濁を精確によく書き分けている」という通説の根拠は全濁音字(日本語の呉音の濁音字に対応)が有声音であった（平山 昭和42:143)ということです。(そしてその根拠はチベット語有声音が中国語の全濁音字で対訳されているという通説に遡るのですが、今は省略します)。そこで全濁音字が有声音(たとえばd-)から清音とまぎれる音(ḍ-：dの無声化子音)に、その後清音(t-)に変化したと考えるのが通説です。しかし全濁音字は有声音(たとえばd-)ではなく最初から清音とまぎれる音(いま仮にT-とする)であったと考えるなら、呉音は清音(t-)と濁音(d-)を精確に書き分けたわけではなく、清音(t-)と清音とまぎれる音(T-)を精確に書き分けたことになります。そしてその後遣隋使・遣唐使などによってもたらされた漢音が濁音(T-)から清音表記にかわった(T-→t-)たことをうまく説明できるでしょう。
 ＊上の問題はのちのHP「かなはなぜ濁音専用の字体をもてなかったのか」で詳しく考察します。この小題は亀井氏の有名な論文(「かなはなぜ濁音専用の字体をもたなかったかーをめぐってかたる」(亀井 昭和61:63-150))のもじりです。中古全濁音字はもともと濁音(有声音)ではなく清音(無声音)にまぎれる音だったので、濁音専用の字体をもつことが可能であったのに濁音専用の字体を生みださなかったのではなく、濁音専用の字体をもつこと自体が不可能だったため濁音専用の字体を生みださなかったことを含意しています。

【引用・参考文献】

＊有坂秀世 (昭和32)　『国語音韻史の研究　増補新版』　三省堂

＊牛島ほか (昭和42) 『中国文化叢書　1 言語』 牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

＊袁家驊等 (1989 2版) 『漢語方言概要』 文字改革出版社

＊王育徳 (昭和42) 「中国の方言」『中国文化叢書　1 言語』 牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　　大修館書店

＊大野晋 (1953) 『上代假名遣の研究　日本書記の假名を中心として』　岩波書店

＊亀井孝 (昭和59) 『亀井孝論文集３ 日本語のすがたとこころ(一)』 吉川弘文館

＊亀井孝 (昭和61) 『亀井孝論文集5 言語分化くさぐさ-日本語の歴史の諸断面』 吉川弘文館

＊詹泊慧 (昭和58) 『現代漢語方言』　樋口靖訳　光生館

＊上代語辞典→『時代別国語大辞典　上代編』　上代語辞典編修委員会編 1967　三省堂

＊高松政雄 (昭和62) 「日本の漢字音」『漢字講座　３巻　漢字と日本語』　佐藤喜代二編　明治書院

＊中国語学研究會編 (昭和44) 『中国語学新辞典』　光生館

＊藤堂明保 (昭和46) 「上古漢語の音韻」『中国文化叢書　1 言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

＊藤堂明保 (1980) 『中国語音韻論―その歴史的研究―』 光生館

＊藤堂明保 (昭和62) 『藤堂明保 中国語学論集』 汲古書院

＊平山久雄 (昭和42)　「3 中古漢語の音韻」『中国文化叢書　1　言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

＊水谷 (昭和42) 「2. 上中古の間における音韻史上の諸問題」『中国文化叢書　1　言語』　牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店

＊森博達 (1991)　『古代の音韻と日本書紀の成立』 大修館書店

＊山口仲美 (1989)　『ちんちん千鳥のなく声は　日本人が聞いた鳥の声』　大修館書店